

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320080

研究課題名(和文) アイヌ語鶴川方言の音声資料による記述的研究

研究課題名(英文) Descriptive Study of Mukawa Dialect of Ainu using Recorded Materials

研究代表者

中川 裕 (Nakagawa, Hiroshi)

千葉大学・人文社会科学部研究科(系)・教授

研究者番号：50172276

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,500,000円、(間接経費) 3,150,000円

研究成果の概要(和文)：故片山龍峯氏の記録したアイヌ語鶴川方言音声資料120分カセットテープ66本、約150時間分を解読し、その中から辞書項目を抽出。見だし語数約6500語の音声データ付日本語・アイヌ語辞書をウェブ上に作成した。また、その音声資料にもとづいて記述的研究を行い、鶴川方言の特徴を明らかにするとともに、沙流・幌別・千歳方言など周辺諸方言との比較を行った。その結果、従来考えられていた沙流方言との類似性は形態統語的な部分に限られ、語彙的にはより複雑な関係であることが判明した。

研究成果の概要(英文)：We analyzed 120-minute 66 cassette tapes (the total of the length is about 150 hours) of the Mukawa dialect of Ainu recorded by late Mr. Tatsumine Katayama. We picked up 6500 items from the data and made a Japanese-Ainu dictionary with sound data on a website, which is the first Ainu dictionary on the net. Also we made descriptive studies on the data phonetically, phonologically, syntactically and lexically, making clear the features of Mukawa dialect. As a result, we found that the likeness between Mukawa and Saru dialects, which has been so regarded, is limited on the morphologic-syntactic level and that Mukawa dialect has more complicating relations with surrounding Saru, Horobetsu, Chitowse dialects lexically.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：危機・少数言語 記述的研究 音声資料 辞書

1. 研究開始当初の背景

アイヌ語鶴川方言は、北海道胆振支庁管内勇払郡の鶴川流域内で話されている方言で、東側に沙流方言、鶴川の上流域にあたる北側には穂別方言、西側には厚真、勇払、白老などの方言が隣接していたはずであるが、厚真・勇払方言については具体的な記録はなく、穂別・白老方言についても残されている記録はわずかである。したがって、沙流方言の西部に関しては、詳しく記述されているのは、これまで幌別方言と千歳方言のみであった。沙流方言は千歳方言とは近質性があるが、幌別方言とは大きく異なり、この地域でのアイヌ語の歴史的発展過程に関しては、その中間地帯を埋める方言の資料が切望されていた。しかし、鶴川方言自体まとまった言語資料は乏しく、断片的な資料から、おそらく幌別などの方言よりは沙流方言に近いのであろうと推測されているにすぎなかった。

今回の資料の話者である新井田セイノ氏と吉村冬子氏は、アイヌ語の母語話者ではあるが長年にわたってアイヌ語を話したことがなく、近年までアイヌ語話者としてはクローズアップされてこなかった人たちである。しかし、1994年前後から、映像作家でありアイヌ語教材の開発者である片山龍峯氏が彼女らに注目し、足しげく通ってインタビューを行うことによって、アイヌ語で自分の思い出話や口承文芸などを語るができるほどに記憶を甦らせた。片山氏は鶴川方言辞典作成を目的に1996年から2002年にかけて、集中的に両氏からの聞き取りを行い、120分テープ66本、総計約150時間分のデータを録音したが、それを整理することなく2004年に他界した。そのテープは2008年に遺族から千葉大学教授では、本研究の代表者である中川裕に委託された。そして、中川がその内容を概観した結果、その資料がこれまで総合的に分析されることのなかった鶴川方言に関する、量的にも内容的にも非常に貴重なものであることが確認された。そこで中川は、アイヌ語教育に実績を有し、特にこの鶴川方言話者の子弟の指導にもあたっていた札幌大学教授本田優子氏と協議し、本田氏を分担者として、この片山氏の資料をアイヌ語教育の教材としても生かせるような形で、内容の整理を行うことを計画した。

2. 研究の目的

故片山龍峯氏の採録したアイヌ語鶴川方言の音声資料を聞き起こし、同資料中の辞書項目に関連する部分を抽出。それを整理して同方言の日本語 アイヌ語辞書を作成し、ウェブ上で検索可能かつ音声データを聴取可能な辞書として公開する。また同資料を分析して、同方言の音韻、形態、語彙および統語論的記述を行い、その文法の大枠を概観するとともに、周辺諸方言との歴

史的関連を推定する。

3. 研究の方法

まず片山氏の記録した120分のカセットテープ66本約150時間分の聞き起こし作業を行った。この作業は千葉大学の院生および研究分担者である本田優子氏の指導下にある札幌大学の院生・学生総勢25名を動員して行い、その聞き起こし文字データのチェック作業を、研究協力者である千葉大学大学院生遠藤志保、小林美紀、深澤美香、東京大学講師の藤田護および中川の5名で行った。このチェック作業は、週一回のペースで各人の聞き起こしたデータを持ちより、音声を聞きながら不明点を相互チェックする形で行った。

次にそのデータから辞書項目となる部分を音声資料とともに抽出する作業を、上記研究協力者を中心に行い、それを日本語見だしによるあいうえお順で整理した。同テープ中には文化的な情報や個人的な会話も多々含まれており、その中にはアイヌ文化の理解に重要な情報も少なくなかったが、最終的に辞書という形式にすることに重点を置き、情報を絞り込んで、音声的にも言い誤りや、言い直し部分を整理する形でデータ化を行った。

データ形式としては、見出し語・話者・聞き起こし内容・内容中に含まれるアイヌ語の日本語訳・備考・音声ファイル名という構成にした。単に日本語に対応するアイヌ語を示すという形式ではなく、片山氏が提示した日本語に対して、新井田・吉村両氏がどのようなアイヌ語を回答したかという対話形式をとっており、またその会話中に現れる意味・用法に関する補足情報も音声データとともにひとつの項目としている点が、これまでの辞書と大きく異なる点である。また、沙流方言下流の富川出身である鍋沢強巳氏が同席している資料があり、その鍋沢氏の発言自体は、別の方言話者ということで削除してあるが、鍋沢氏の記憶していた単語を新井田・吉村氏が発音しているものもあり、それについては辞書項目とするとともに、備考欄にその旨を記した。また、新井田・吉村両氏は長年、日本語話者の中で生活しており、そのために発音や文法が変化しているのではないかと思われる現象も見られた。それについても備考で指摘することにした。

このように整理した資料を、業者に委託してウェブ上で検索及び音声聴取が可能な辞書形式にした。

このようにデータ整理を定期的に行う傍ら、その音声データから得られた鶴川方言の音声学、音韻論、形態論、統語論および語彙論的な特徴を各人が分析した結果を報告し、それについて討議を行った。また周辺諸方言とくに沙流・幌別・千歳方言との比較を行い、鶴川方言の歴史的な位置づけを試みた。研究代表者の中川は、長年にわたり沙流方言および千歳方言の記述的研究を行っており、その両者の歴史的関連につい

てもこれまで考察を行ってきたので、地理的にその中間的な位置に存する鷓川方言と両方言との関係を分析した。

4. 研究成果

(1) 「アイヌ語鷓川方言日本語 アイヌ語辞典」として、6500語の見出し語を擁する音声付辞書をウェブ上に作成・公開した (<http://cas-chiba.net/Ainu-archives/mukawa/>)。これはウェブ上で検索可能な世界初のアイヌ語辞書であり、かつ例文を含め収録された文字資料全体の音声を聞くことができる初めての辞書である。音声データ付の辞書としては、これ以前に萱野茂(1999)『萱野茂のアイヌ語辞典 CD-ROM』(三省堂)があるが、見出し語以外の内容・和訳に関してもフリーワード検索ができるという点や、特別な検索ソフトを必要とせず、ウェブ上の通常のブラウザで検索ができるという点で、本鷓川方言辞典のシステムのほうがはるかに便宜性が高い。また、鷓川方言初の辞書というばかりでなく、本格的な日本語引きのアイヌ語辞書はこれまで存在せず、その意味でもアイヌ語学習者にとって非常に利用価値の高いものとなっている。

(2) 本音声資料の分析により、新井田セイノ・吉村冬子両氏の音韻的・文法的・語彙的特徴を抽出した。その際に論点のひとつとなるのは、それらの特徴が、鷓川方言という地域変種に属する特徴なのか、長年日本語社会の中で生活してきたことに起因する、日本語の影響による個人的な変異なのかということである。本研究では後者と思われる特徴を除いた後に残るもののうち、周辺諸方言との関連で同地域の特徴と推定されるものを前者に属するものと考え、それに基づいて周辺諸方言との歴史を考察した。

(3) 日本語の影響によっておこったと思われる変化は、言語変容研究の観点から重要な問題であるが、これまでのアイヌ語研究ではごくわずかしかり取り上げてこられなかった。両氏の資料においては、音韻論的な観点からは、-tk->-kk-、-pt->-tt-などの-CC-連続における逆行同化がその代表的な現象とみなされる。文法的には人称接辞の脱落と、それに代わる人称代名詞の多用、接続助詞の脱落、場所目的語動詞等における不要な or un「~に」などの格表示の付加、逆に不定人称構文における or wa「~から」の脱落などの現象がこれにあたるものと考えられる。ただし、北海道東部方言などでもこのうちのいくつかの現象と類似のものが見られるので、日本語の影響で起きたものと断定するには、なお一考を要する。

また、たとえば格表示において or un「~に」の付加のような現象は見られても、一般のアイヌ語学習者である日本語話者が犯すような誤り たとえば、場所を表す or ta「で」

を、手段を表す ani「で」と混同するというような誤りは見られない。新井田・吉村両氏は姉妹ではあるが、一緒に育ってはおらず、幼少時の言語環境も異なっている。それにも拘わらずこの点において同様の傾向を見せるということは、単純に日本語の影響ということだけで説明できる問題ではなく、言語構造上他言語に影響されやすい部分と影響されにくい部分があるということが言えるのではないかと考えられ、こうしたいわゆる「崩れ」と考えられる現象の法則性は、一般言語学的にも興味深い資料となるであろう。

また、日本語の影響として考えるべきか、地域変種として考えるべきか問題となるものにひとつとして、cakke「開く」「~を開ける」、rewke「たわむ」「~をたわませる」のような自他同形の語形が挙げられる。アイヌ語は自他の区別が明確な言語で、日本語の「(~を)ひらく」や英語の open のように自他ともに同じ形になる動詞はきわめて少ない。cakke, rewke も、他方言では自動詞専用の形であり、他動詞はそれぞれ caka, rewe となる語である。この他動詞形の消失という現象は、沙流方言でも perke「割れる」、pere「~を割る」の間に見られ、後者は通所の文脈では使われず、ある決まった表現にしか出てこない。こうした自動詞形への収束、あるいは他動詞形の消失といった現象がどういう意味を持つのか、これも今回提起された問題である。

(4) 地域変種としての特徴と考えられるものとしては、人称接辞 ku=, ci=が母音の前で k=, c=と縮約される現象や、人称代名詞複数形が-oka 系で統一されている点などが挙げられる。前者は沙流・千歳方言の特徴であるが、後者は千歳方言では-okay とのゆれが見られるのに対し、鷓川方言にはそれがいないことから、このふたつの現象は鷓川方言と沙流方言の近さを表すと考えられる。これは、沙流川流域と鷓川流域の近接度からして、これまで当然のように考えられてきた特徴である。

しかし、語彙的には、たとえば「窓」を表す語として、puray と puyar の両方が見られるが、前者は白老・幌別などの胆振方言で特徴的にみられる語形であり、同方言との関係も無視できない。一方、「さみしい」を表す語として mismu と nismu という語形が両方出てくるが、mismu は沙流・千歳方言独自の語形であり、それ以外の地域は nismu または nisnu である。分布と語形から考えて、nismu > mismu、および nismu > nisnu と考えられるので、nismu が古い形であるとする、nisnu があるのは沙流方言で起こった変化がまだ起こっていない形の残存という可能性がある。

また、「父親」を表す iyapo などの語形は沙流川でも下流域の方言と共通するが、その一方で hinak「どこ」のような語形はむしろ

沙流川上流域と一致する語形である。また eramuskari「～を知らない」という語形は沙流方言には現れることは現れるが、むしろ優勢なのは eramiskari であり、幌別方言でも同様である。この語形がおもに使われているのは千歳方言であり、同じく沙流方言よりむしろ千歳方言と共通する「～を開ける」「開く」を表す caka, cakke と合わせて、鶴川穂別 千歳の関連もまた考えていかなければならない。この他、「どのように」を表す makak のように、この方言独自と思われるような語形も存在する。

したがってこれまで考えられていたように鶴川方言が沙流川下流域の方言と共通性が高いとは、単純には言えないことが、この研究で明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://cas-chiba.net/Ainu-archives/mukawa>

6. 研究組織

(1)研究代表者

中川 裕 (NAKAGAWA, Hiroshi)

千葉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号: 50172276

(2)研究分担者

本田 優子 (HONDA, Yuko)

札幌大学・文化学部・教授

研究者番号: 30405625

(3)連携研究者

()

研究者番号: